

擦れ合う組織

写真家 紀成道
きの せいどう



例えばここにある一枚の写真に対して、「なぜその瞬間そこでその角度からシャッターを切ったのか」と聞かれても、「目にしたものには何かしら心が動いたから」と僕の返答は曖昧になってしまう。ただ、複数枚、例えば写真展や写真集を前にして、「どうしてずっとそこに通ってシャッターを切り続けていられたのか」と問われたら、わりとしっかりした答えが出てくる、と思っている。そんな話をさせていただきたい。

左ページにあるのは島根県上空で撮影した写真。東京からの飛行機で降り立つはずだった隣の米子空港で着陸許可が下りず、周回していると窓の向こうにこの景色が現れた。目を凝らしてもよく理解できなかったが、緑の山々にぽっかり開いた穴が謎めいて、幾度かシャッターボタンを押した。しばらく後になって、山仕事で木を切り出した跡だと知る。

古来の「たたら製鉄」と技能継承に興味があつて島根を訪れていた。僕は大学で鉄冶金を専攻していたため、どうしたら砂鉄と木炭からこんなにも美しい玉鋼を得られるのかが不思議だった。貴重な文化的営みゆえに、なかなか現場を訪ねて撮影することは叶わず、そのうち新型コロナウイルス禍に日本も見舞われ、たたらを拝む機会がますます遠のいた。代わりに、地域での出逢いに恵まれた。住民だけでなく彼ら彼女らを取り巻く風土に巡り会えた。島根は風が強く天候が瞬く間に変わって、雲はたなびき、雨がよく降り、虹を頻発させ、やはり神話的である。また、古くは製鉄の原料を得るために山を削り、跡地を田畑に転用して人を養ってきた。結果、特産品の仁多米が生まれた。しかし住民の高齢化が原因で、耕作地の一部は他の植物や獣に侵食されていく現実には直面している。こうした密やかな光景を

目の当たりにし、写真に収めてきた。

僕はドキュメンタリー写真家を標榜している。日本の抱える課題を世界と共有したい。ただそれは、悪事を暴くジャーナリストティックなものではなく、悲しい私事をさらけ出すわけでもない。友人との会話がきっかけで気になった土地に赴き、課題を抱える当事者たちと状況を見つめていく。同時に思いのままにも地域で撮影を続けていると、自分自身の心に引っ掛かっている何かに気づけたと着く。

島根を訪ねまわると、高齢化で存続が危ぶまれる文化が多々ある中、上手に持続可能な運営をしている組織は存在するとわかる。名家、猟友会、農事組合法人などなど。共通していたのは、「擦れ合い」を厭わない雰囲気だ。出雲にある大土地神楽は、老いも若きも互いを尊重しつつ、それぞれの立場から意見を伝え合う。古台本のように残すべきものは引き継ぐ一方、映像配信といった新しいものを遠慮なく取り入れる。秋に神楽の奉納を終えると直会で酒を酌み交わし、朝までぶざけ合う。彼らの関係性は、

突き放したり、呑み込んだり、場の雰囲気察して距離を置いたりでもなく、うまく擦れ合っている。女子高生から後期高齢者まで揃う神楽方は明るく勢いがあり、誰しも居心地よいから人が寄り続ける。ダイバーシティやレジリエンスという月並みな言葉を安易に使いたくはないが、自然にそのようなことを体現していた。

つるつるした都会の日々を送る僕はそれがうらやましかった。街に住んでも学校のクラブ活動、マンシヨンの管理組合、会社の部署という小さな所属単位はあるわけで、子どもから大人へと歳を重ねるうちに擦れ合いは減り、あれこれせわしない暮らしにできる限り摩擦を持ち込むのを避けようとする。それぞれの組織運営は誰かに委ねて、沈黙を貫くのが作法なのかもしれない……。僕が島根の片隅で撮り続けられたのは、人と人、人と自然、自然と自然の、厳しくも優しくもある擦れ合いに際し、時に巻き込まれることで生きている実感を味わえて幸せだったから、と思っている。



島根県上空より撮影



たたらで出来た玉鋼

時の調べ
Essay

略歴

1978年、愛知県生まれ。
「接点」をテーマに日本を撮影するドキュメンタリー写真家。
2025年に「風と土」で伊奈信男賞「The Strata of Time」
や Sony World Photography Awards 2025風景部門1位を受賞。写真集に『かぜとつちとx elements』『MOTHER』『Touch the forest, touched by the forest』（いずれも赤々舎）がある。